

英語を「好き」でいること

あるテレビ番組のインタビューで、翻訳家の戸田奈津子さんが視聴者からの質問に答えていた。そのなかのひとつは「どうしたら英語が上手になりますか」という質問であった。何か魔法のような学習方法が飛び出すのかと、戸田さんの答えに耳を傾けていた私は、一瞬呆気にとられた。彼女はひとこと、「英語を嫌いにならないことです」と答えた。あまりにも簡単な、しかし言い得て妙なこの答えに私は感動したものである。嫌いになってしまったら、続けていくことは難しい。これは英語に限った話ではないであろう。最初は「下手の横好き」でも構わないではないか。嫌いにならなければ、それがいつか「好きこそ物の上手なれ」となる日が来ると私は考えている。



AI FUJIWARA

経済学部非常勤講師。
 東京都出身。1998年東京外国語大学外国語学部朝鮮語学科卒、2001年同大学大学院地域文化研究科ヨーロッパ第一専攻修了（言語学修士）。現在同大学院博士論文執筆中。専門は第二言語習得理論、外国語教授法。

言語に敏感になろう

日本にいながらにして英語習得を容易にするにはどうしたらいいのか。中学校から始まり大学に入学するまでの少なくとも6年間、みなさんは英語の基本的学習方法を身につけてきたことだろう。英語学習の手段としてはCALL (Computer Assisted Language Learning) や WBT (Web Based Training) といった新たな学習法があるにせよ、学すべき柱となるもの（発音、語彙、構文など）は基本的に変わらない。では、今までの学習方法は続けるとして、それ以外に何をすべきなのか。まずは日本語を含めた言語能力の向上に努める必要がある。いくら英語を学習しても、言語の持つ微妙なニュアンスが理解できなければ使いこなすのは難しい。要は英語力ではなく、その基盤となる言語能力自体を高め、言語というものに敏感になることが、結果として英語力の向上にもつながるということである。

昨年度の授業では、英語に直訳できない日本語（例：彼は口ばかりだ）を英語で表現する練習を行った。日本語の意味を正確に理解できていないと英語には直せない。言葉の持つニュアンスを時には説明的に、時には意識として英語で表現する訓練だ。元々は、翻訳ソフトによる英作文を阻止するための作戦であったが、結果として私が想定していた表現以上の数々の名訳（迷訳？）が飛び出し、非常に興味深いものであった。これからの大学生活で日本各地の方言や英語、第二外国語など様々な言語に出会おうと思うが、そのときは「言語に敏感になる」というキーワードを思い出してほしい。



海外へ行こう！

英語が科目のひとつに過ぎないと思っているならば、英語圏の国に行ってみることを薦める。英語は私たちの日本語同様、常に変化し続けるダイナミックな言語である。今まで紙上で学んできた言語が、実際に生き生きと使われている場面を目の当たりにして欲しい。日常に溶け込んだ英語に触れることで、コミュニケーションツールとしての英語を再認識できるであろう。英語に触れることが目的ならば、英語の歌や映画で構わないと考えるかもしれないが、歌や映画により英語をインプットする（聞く、または読む）ことはできてもアウトプットする（話す、または書く）機会がない。アウトプットを目的として、英語の歌を歌ったとしても、対話のようなインタラクティブな活動とは言い難い。コミュニケーションの道具としての英語を習得するためには、自分の意思を伝えるために話し（書き）、相手の意図を理解するために聞く（読む）といった相互のやりとりが不可欠だ。この点において、海外旅行は非常に手っ取り早い手段であるといえよう。



大学で学ぶ英語とは

毎年私のクラスでは初回の授業で、英語学習経験を踏まえた自己紹介をしてもらうのだが、ほとんどの学生が英語は「嫌い」もしくは「苦手」と答える。確かに大学入学以前の英語は、単に授業科目または受験科目なので勉強せざるを得ないといった位置づけに過ぎなかったかもしれない。そのため、暗記した単語や熟語、構文を駆使し、ただひとつの「正解」を導き出すことに必死になっていたのではないであろうか。高崎経済大学での英語の授業を通して学んで欲しいことは、ひとつの「正解」を導き出すテクニックにとどまることのない、コミュニケーションのため、もしくは自己表現のための実践的な英語である。以下は私が新入生のみなさんに贈る、言語学習のためのいくつかのヒントである。



英語を学ぶためのヒント！

藤原 愛